

福島県放送伝道を支える会のあゆみ

(注：2006年7月に行われた東北教役者会の分科会にて発表した内容を整理した)

．ライフ・ライン放送が始まるまでの経緯

1．福島県放送伝道を支える会の成立

かつて、「十字架の時間」というラジオ番組をラジオ福島から放送していたが、しばらく放送が途絶えていた。しかし、「福島県の放送を私たちの手で」という大きなビジョンを掲げて、小野芳枝師（東洋福音宣教会）が中心になって、福島県内の諸教会に呼びかけ、1年余りの準備期間を経て、1970年3月29日（日）より、ラジオ福島から「世の光」を放送開始した。放送開始当初の「福島県ラジオ放送準備委員会」には、坂本勝重師（日本イエス・キリスト教団郡山キリスト共同教会）、富岡家一師（東北伝道隊会津聖書教会）、栗原隆師（東洋福音宣教会湯本キリスト福音教会）、グレニス・ジョンス師（石川荒町キリスト教会）、A・ブルスタード師（東洋福音宣教会）、小野芳枝師（東洋福音宣教会好間キリスト福音教会）が名前を連ねている。当時、毎週日曜日午後7時からの15分番組を放送するために、月額10万円の目標献金額が掲げられていた（内訳；電波料5万円、制作費1万円、フォロアップ費3万円、その他1万円）。また、この働きのために、東洋福音宣教会の宣教団体が、大きな重荷を負ってくださった。ノルウェーの1信徒が、このラジオ放送のために、当時の金額で、35万円をささげて下さったことなどが、過去の資料の中に記録されている。以来、ラジオ放送を通して、1996年まで、27年間、「世の光」を放送した。その間、デイリー世の光とウィークリー世の光の両方を放送する時代を経て、経済的な理由から、デイリー世の光のみ放送と変遷はあった。

2．テレビ放送の開始

1993年、野田信光兄（創世グループ取締役）が、PBAを通して、「電波料を献金するから、是非、福島県でテレビ伝道を！」と呼びかけてくださり、当時、福島県放送伝道を支える会の委員長であった原匡邦師（日本イエス・キリスト教団笹谷教会）が中心になって、テレビ伝道の可能性を探った。野田兄弟との話し合いを通して、委員全員に、これは主からのチャレンジであるという確信が与えられ、臨時委員会、協力教会へのアンケート、臨時総会等を経て、1993年11月6日（土）より、福島放送（KFB）より、「ライフ・ライン」放送が開始された。テレビ放送開始時の委員は、原匡邦師（委員長）、後藤正嗣師（会計）、土屋信二師（書記）、富岡家一師、小野芳枝師（フォロアップ）であった。

3．13年間のあゆみ

テレビ放送開始から、3年ほどして、ラジオ放送が経済的に行き詰まり、約120万円ほどの赤字を背負った。その結果、テレビ放送一本に絞ることが決定された。ラジオ放送は激論の末、献金の窓口は残し、献金が200万円を越えた段階で、期間を限定して放送をすることとした。

この決定を踏まえて、ラジオ放送の赤字が解消し、200万円の資金が与えられた2001年1月～2002年3月まで、ウィークリー世の光が放送された。

原匡邦師が委員長の時に、テレビ放送がスタートしたが、その後、鳥井健男師（日本イエス・キリスト教団郡山キリスト共同教会）、後藤正嗣師（保守バプテスト同盟牧羊キリスト教会）と委員長が引き継がれて、現在の福島県放送伝道を支える会が発展してきた。

．数字で見る福島県放送伝道を支える会の現状

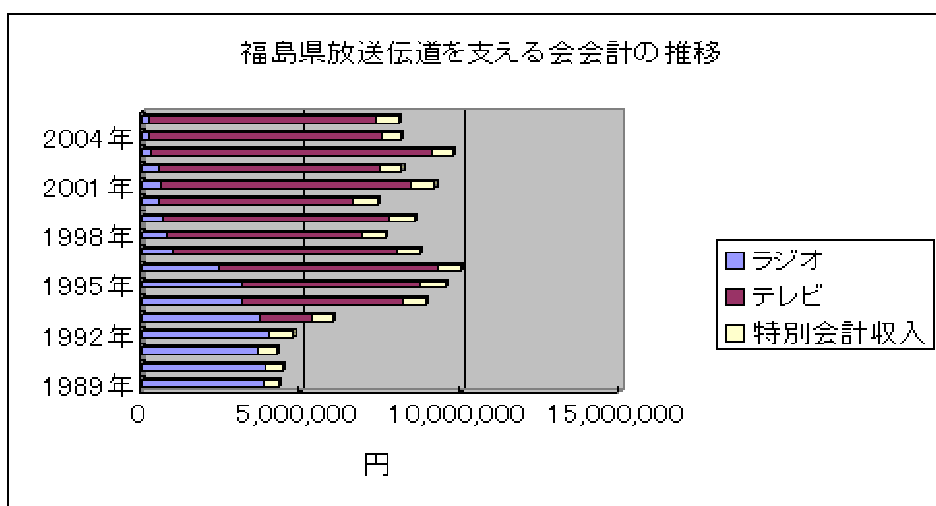
テレビ放送を始めてから、放送伝道を支える会の収入が飛躍的に伸びたことが分かる。また、当初は、野田兄弟の献金に頼って開始されたテレビ放送であったが、次第に、教会献金が増えて来てはいる。しかし、未だに、年間40～50万円ほどの赤字が生じる傾向をぬぐえないでいる。

アピールをして危機感が高まると献金が増額するが、赤字が解消し、ホットするとまた赤字が生じるという状況が、数年間続いている。

参考資料 1

福島県放送伝道を支える会 16年の歩み

年度	ラジオ	テレビ	特別会計収入	総収入額	協力教会数	来信総数	備考
1989年	3,825,680	0	505,825	4,331,505	37	519	
1990年	3,870,879	0	565,766	4,436,645	37	460	
1991年	3,639,938	0	589,877	4,229,815	37	314	
1992年	3,988,807	0	781,621	4,770,428	40	269	
1993年	3,739,764	1,586,872	702,494	6,029,130	40	292	10月よりTV放送開始
1994年	3,179,203	5,025,848	721,608	8,926,659	43	420	
1995年	3,179,203	5,594,937	769,099	9,543,239	44	569	ラジオ120万円未払い
1996年	2,410,134	6,899,189	720,257	10,029,580	45	362	ラジオ放送休止
1997年	976,478	7,053,721	720,257	8,750,456	43	699	
1998年	822,266	6,104,196	730,201	7,656,663	43	705	
1999年	644,922	7,118,659	796,408	8,559,989	42	409	
2000年	520,955	6,114,475	772,518	7,407,948	42	365	赤字4ヶ月分
2001年	588,872	7,884,817	722,434	9,196,123	44	389	ラジオ放送再開(1年限定)
2002年	539,994	6,911,564	717,509	8,169,067	45	314	赤字4ヶ月分
2003年	308,216	8,779,199	686,658	9,774,073	45	290	
2004年	262,942	7,271,296	611,543	8,145,781	45	297	赤字3ヶ月分
2005年	275,721	7,094,443	688,037	8,058,201	46	245	



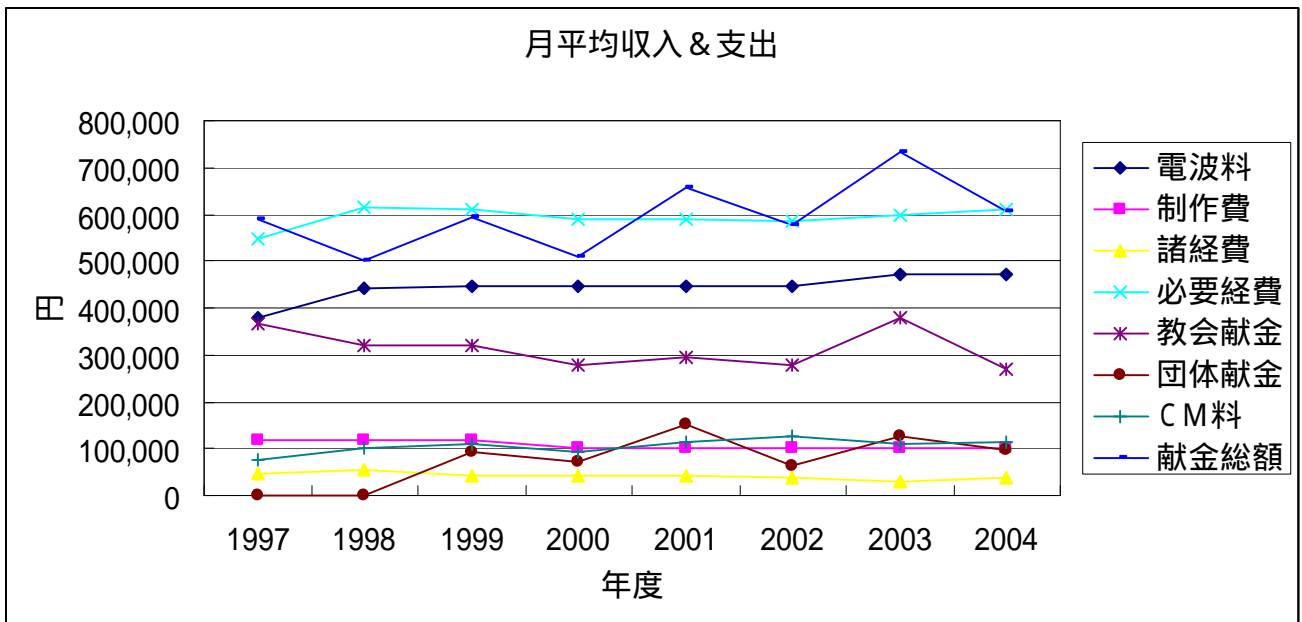
参考資料 2

最近8年間の月平均収入 & 支出 (主な項目のみ)

【 A 】

【 B 】

年度	電波料	制作費	諸経費	必要経費	教会献金	団体献金	CM料	献金総額	A - B	支払遅れ
1997	378,000	120,000	47,345	545,345	365,140	- *	75,417	587,810	42,465	
1998	442,557	120,000	52,943	615,500	319,374	- *	102,000	502,366	-113,134	2ヶ月遅れ
1999	445,557	120,000	43,835	609,392	318,833	91,667	107,833	593,222	-16,170	2ヶ月遅れ
2000	445,557	100,000	44,192	589,749	278,791	70,000	94,500	509,540	-80,209	4ヶ月遅れ
2001	445,557	100,000	42,950	588,507	296,275	151,667	112,917	657,068	68,561	3ヶ月遅れ
2002	445,557	100,000	38,514	584,071	277,778	61,729	128,167	575,964	-8,107	4ヶ月遅れ
2003	471,017	100,000	28,128	599,145	**378,643	126,667	108,500	731,600	132,455	2ヶ月遅れ
2004	471,017	100,000	38,049	609,066	270,280	95,833	113,667	605,941	-3,125	3ヶ月遅れ



* 団体献金がなかったのではなく、教会献金に計上されている。

献金の総額が増えたのは、この年から、放送パートナー献金を設立し、一年で約50万円ほど、献金の底上げが実現したため。

** ある教会から、多額の特別献金があったため、一時的に収入が伸びた。

・福島県放送伝道を支える会に関わって

放送伝道のあゆみ

小野 芳枝

「あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見出そう。」

伝道者の書 11 : 1

放送伝道は、1968年4月、(東洋福音宣教会の)合同教師会席上にて、世の光放送再開を協議し、

1969年、第一回浜通準備委員会発足、3月8日中通り地区準備委員会決定、事務所を好間町上好間
忽滑57に置き、小野がフォロアップをすることになった。

1月6日、ノルウェーの1信徒が36万円を放送伝道のために献げてくださったのを機に、二百万
県民の救いのために、信仰を持って始めようということになり、1970年3月29日(日)復活の日
から、羽鳥純二師によるウィークリー世の光(毎週日曜午後11時よりの15分番組)が始まった。そ
れから3年後の1973年1月8日からはデイリー世の光(月~土朝6時40分よりの5分番組)が開
始された。

こうして20年の間、一日も休むことなく放送を続けて来ることができたのは、日本の魂を愛してや
まない敬愛するノルウェーの兄弟姉妹達の熱い祈りと献金、また、県内外の各教会のおひとりびとりの
熱いお祈りと尊い献げもの、一方的な神のあわれみによるものと感謝している。

本当に心から主をほめたたえたとともに、この働きに参加してくださった多くの方々にも筆では書き
表すことのできない感謝をささげたい。

しかし、この20年間には、紆余曲折も多くありました。円高と、ノルウェーの経済事情により、1
986年には、放送中止もやむを得ないという状態にまで追い込まれました。しかし、あわれみに富み、
事をはじめられた神は、途中で捨てるお方ではありませんでした。ウィークリー世の光は中止になりま
したが、1年間、太平洋放送協会でも電波料(ママ)を免除して下さり、県内各教会も重荷を持って立
ち上がって下さいました。今に至るまで、デイリー世の光を続けることが出来ました。心から主の御
名をほめたたえ感謝いたします。

どんなに多くの方々がこの放送を通して慰められ、励まされ、希望を与えられたことでしょう。

カーラジオで、散歩をしながら携帯ラジオで、また、農作業をしながら、炊事をしながら、病床から、
多種多様な人々、年齢の方々が喜んでお便りを送って下さいました。

精神的に病んでいる人も多く、質問相談、電話相談もありました。また、19回を数える世の光大会
は、羽鳥明先生、村上宣道先生、羽鳥純二先生とともに、県内の聴取者の方達と親しくお交わりする良
い機会となりました。

約20年の来信総数はのべ16,289通、その中、初めてお便り下さった方は、5,979通あり
ました。教会出席は男が31人、女45人で、合計76人。受洗した方は、男13人、女18人、合計
31人でした。その他に、連絡がなくて受洗した方がたも多いと存じます。

世の光大会の出席人数は、平均人数で、いわきが106人、郡山147人、福島100人、会津49
人、白河(礼拝)54人と言うところです。

1991年から放送時間が午前5時5分からに変更になり、心配していましたが、新しい人々が聞く
ようになり、感謝しております。

ライフ・ラインの歩みを振り返る

牧羊キリスト教会牧師・後藤正嗣

1993年5月、PBAから「福島市の野田兄が電波料金をささげるということでテレビ伝道を始めたい
との重荷が与えられているので、支える会で検討していただけないか」との打診が、原委員長にあった。

それを受けて7月19日、PBAからの出席を求めて、臨時委員会を開いた。そして、前向に取り組
む野田兄から直接話を聞く、の二点を確認した。

7月23日、原委員長以下委員全員で野田兄を訪ね、懇談の時を持った。結果、「これは主からのチャ
レンジである」との確信が、委員全員に与えられた。それを受けて協力教会にアンケートを求めること
とし、賛成多数であれば9月に臨時総会を行うことにした。アンケートの結果は回答21教会中、賛成
18と大多数の教会が賛成して下さった。

9月27日、郡山純福音教会において臨時総会を開いた。出席教会16,PBAから榊原師と関根師が出
席された。活発な質疑が行われ、採決の結果、全会一致でテレビ伝道を行うこととなった。そして11
月6日(土)、記念すべき第一回の放映が、福島放送から上映された。

野田兄には三年間、電波料金の重荷をもっていただいた。その間、少しずつ教会の献金も増えていっ

たが、ラジオとテレビを両立させることは難しかった。テレビの献金が増える一方でラジオの献金が漸減し続け、1996年にはPBAへの未払金が120万円を超える見通しとなった。1995年と96年にわたり二年越しで今後のことを話し合った。容易に結論は出なかった。今まで二十数年間、ラジオのためにあった支える会だったのだから。しかし、このままでは共倒れになることは見えていただけに、辛いけど、どちらか一方を切るしかなかった。アンケートの結果、1996年の総会で4月からラジオを、借金返済が終わり更に200万円の基金ができるまで一時休止することを決議した。苦渋の選択であった。小野先生の「ラジオをやめるなら私もやめます」と、野田兄の「テレビをやめてラジオ一本にしましょう」。この二つの言葉は今も小生の耳に焼き付いている。

この年の5月、テレビCMを始めた。年間100万円を超える収入が見込めたのでずいぶん助かった。また、2001年からは「放送パートナー」という制度も取り入れた。年間100万円の目標には届かないが、それでも毎年確実に50万は超えている。

2004年にPBAへの未払金が三ヶ月になった。これ以上増えたら、ラジオと同じようにやめなければならぬピンチである。そこで、借金が限度に来ていることを意識していただくために、返済会計予算を立てた。結果は半分の実績であったが、未払金三ヶ月は変わらなかった。今年こそ、一ヶ月は減らしたいと願っている。

思いがけないテレビの威力

福島聖書教会牧師・木田恵嗣

1998年より、福島県放送伝道を支える会の委員として関わって8年余りが過ぎたが、その間、テレビ放送の威力を知る経験をした。

1999年の秋、教会堂兼牧師館として借りていた家を立ち退いて欲しいと打診された。これは、小さな教会にとって、大きな痛手であった。借りていた家ほどの好条件で借りることの出来る物件は皆無であったし、会堂建築に踏み出すには資金が足りなかった。

そのような中、中古物件を購入を検討する過程で、思わぬ掘り出し物に出会った。土地が92坪、総二階建て建坪48坪の接骨院が2千5百万円で売りに出ている。一階が診療所、二階が住まいという、私たちの希望にもってこいの物件であった。早速、持ち主と交渉に入ったが、会いに行くなり、「エホバの証人なら、売らねゾイ。」と言われた。キリスト教には知識のない持ち主に、キリスト教とエホバの証人の違いについて説明するのは一苦労であった。そのうち、この接骨院の主人が、脳梗塞で倒れてからは、毎週土曜の朝に放送される「ライフ・ライン」を見ている事が分かった。「その番組は、私たちの教会がスポンサーになって放送しているのです。」と語ると、「あれは、いい番組だゾイ。」と話が弾み、「ライフ・ラインを支援している教会なら、間違いない。」と交渉がトントン拍子に進んだ。

2000年11月、新会堂の献堂式を執り行った。教会員も、まわりの人々も、あっと驚く鮮やかな神様のみわざであった。

公共の電波を通して放送されているキリスト教番組、そして、それを支援している教会であるというだけで、このような信頼を勝ち取ることが出来るとは、大きな驚きであった。

この電波を通した伝道的手段をもっと有効に用いることを考える必要があると思っている。